

講座全般の感想と気づき

2018年4月13日

柳田 幸紀

私は8年間中学校と高校に勤めた後、途上国の教育、特にアフリカにおける理数科教育の質向上を目標とする事業に携わってきました。そうした業務の中で感じたことの一つは、研修を通じて新しい知識や技術を教員に伝達し、授業改善や児童の学習方法の変化を試みても、変化はほとんど起こらないということです。カリキュラムやモニタリングシステムなどの教育制度も改善し、初期の実践を強制的に促す環境も作ったが機能しませんでした。今後も人づくりにかかわることから、人が抵抗感なく行動を変える方法を学びたいと思っていたところ、原田メソッドを発見し、ぴったりだと感じて受講を決めました。

原田メソッドを学んで初めに感じたのは、目標から行動までが非常に体系的であるということです。私は10代までゲーム三昧でしたが、20歳から自分をロールプレイングゲームの主人公に見立てながら、資格取得などの短期間の目標を立て、強みや弱みを自己分析し、今後のキャリア形成に必要なスキルを経験的に積み上げてきました。オープンウィンドウ64や長期目的・目標設定用紙、ルーティンチェック表、日誌という一連のツールが、そうした行動を理論立ててくれました。行動を実践する中で最も楽しかったのは自己効力感・肯定感が意識的に感じられたことで、今までと異なる達成感を得ながら、自信を持って新たな習慣を形成していく足掛かりになりました。

次に、12の能力分析、4観点、理念によって、今まで想像していなかった自分の思いに気づき、心づくりをした上で新たな行動を生み出すことができたことに驚きました。教員として観点別評価を行った経験がありますが、こうした能力を伸ばすための行動やその基盤の構築の仕方は十分理解できていませんでした。今回の実践を踏まえ、他者に対する貢献も目的の一部に組み込み、メンター・メンティの関係性を通じてストロークを与え、また受け取り、協働しながら、主体変容できることが実感できました。

自身の能力向上や心づくりを継続し、目標を達成し続けるための習慣形成のために、ルーブリックとルーティン表を用いた評価と、各ツールの添削と改善の視点が不可欠であることも理解できました。これまでは大きな目標を念頭に置きながら、毎日の計画を立てて実行していましたが、行動の可否に一喜一憂するばかりで、明確な道筋や正しいはしごを選んでいるか確認せずに歩んできました。ツールを用いて行動を定量的に評価することで、改善の方向性もより明らかになったと感じています。

以上のことを学び、ペアコーチングを実践する中で、私が原田メソッドを通じて学びたかった、他人の考え方に変化を促し、行動を変えていただく方法が身に付いたと感じました。原田先生は講義の間、何回も受講者をほめながら、全体の空気を盛り上げ、絶対にできるという勇気を与えてくださいました。私自身もそうした考え方に共感し、多くの方々が幸せで